

近世曹洞宗における関三刹成立の諸問題

―下総総寧寺を中心に―

安 藤 嘉 則 *

Some problems on the "Kan-san-satsu" of Soto Zen Sect in Edo Period : The case of Soneiji temple.

Yoshinori ANDO*

【要約】

近世初頭江戸幕府は曹洞宗に対し関三刹を選定し、この三ヶ寺によって一万七千ヶ寺以上を超える曹洞宗寺院を統括支配する体制が確立したが、この関三刹寺院はいずれも関東の了庵派寺院であり、永平寺・總持寺・大乘寺・正法寺等の寺格の高い寺院から見ると逆転現象となっている。本稿は関三刹のうち下総総寧寺を取り上げ、如何にしてこの寺院が「天下大僧録」の地位を占めるようになったのか考察するものである。総寧寺は近江・掛川・笠間・関宿・国府台と寺基を移転しており、天正三年下総関宿に再興（当初乗安寺として再興）されてから年後慶長一七年には関三刹の地位を得ているが、わずか三十余年での何故なのか不明な点が多かった。筆者が注目したのは次の二点である。まず武田勝頼領国内の曹洞宗寺院の争論（大雄山輪住問題）では関三刹以前であった関宿総寧寺（乗安寺）と龍穩寺に相談するに至っており、少なくとも関東了庵派や最乗寺に関する権限についてはすでに大きな影響力を有していたことが確認された。次に天正から慶長年間に総寧寺の発展に貢献した巨海良達の代語・代語抄資料・史料を検討すると、これまで顧みられなかった実績が明らかになった。注目すべき点は玉縄大応寺にあった巨海が秀吉の小田原攻めの際、玉縄で籠城していた北條氏勝を無血開城させたことである。その結果玉縄北條氏は大名として存続し、関東に入った

徳川家康は北條氏の宗教政策によって築かれた基盤を利用しながら寺院勢力を統治していったのであり、歴史的にもこの玉縄開城は大きな意味をもっていたと考える。このように総寧寺は近世の幕藩制体制形成期において関東の権力層と結びつきを強めていった形跡が見られたのであり、近世曹洞宗の支配体制の成立過程を考察する上で重要な意義を有する寺院であるといえよう。

一、関三刹の成立の問題について

江戸幕府はその宗教政策を執行する際、各宗派に対して宗門統制機関としての触頭を関東の有力寺院から選定しており、曹洞宗の場合、関三刹（関三箇寺）がこの触頭の任に当てられ、寺社奉行の布達を地方の有力な寺院を中間である触頭（録所）を経由して末端の宗門寺院を統制している。この関三刹寺院は承応元年（一六五二）に総寧寺高国英峻の永平寺二七世晋住以降、関三刹の住職職が順次永平寺へ晋住することとなり、それまで宗門寺院の行政的統括機関であった関三刹が、本山永平寺の権威をも併せることとなり近世絶大な影響力を行使するに至る。

ところで近世曹洞宗の僧録制度は中世の伝統をふまつつも、幕藩体制下における新たな支配体制の確立であったといえるのであり、当初から総寧寺・龍穩寺・大中寺が関三刹として任じられていたわけではない。中世までの僧録は有力寺院が天皇からその寺格を受けていたものであり、通幻寂霊（二三九一年寂）の永沢寺が応安年中に後円融天皇から「天下僧録」を任じられたのを初見として、嘉吉元年（一四四二）五月七日には花園天皇から正法寺へ出羽陸奥両国の僧録を、文明十一年（一四七九）には土御門天皇から下総乗国寺松庵宗栄に関東僧録を授けていた^①。すなわち曹洞宗の場合、僧録としての認定は朝廷の権

威を背景にしたものであった。

しかるに近世初頭にみられる幕府の各宗派に対する寺院統制は、まず朝廷の権威の下に成立していた既存の体制から幕府側による僧録制度への転換がはかられたのであって、後水尾天皇の譲位の契機となった紫衣事件などもその象徴的な事件であった。こうした傾向は曹洞宗においても同様である。徳川家康は東海の一大名時代であった天正十一年一月二十八日、遠州可睡斎（袋井市）に対して三河・遠江・駿河・伊豆の東海大僧録に任じている。これは可睡斎等膳と家康との直接的関係から築かれたものであったが、この支配体制は関三刹体制成立後も依然として維持されたのである。

家康は関東に入ってから慶長十年に上野・信濃・越後・佐渡の僧録を上州双林寺に任じ、さらに開幕して全国に支配が及ぶに至ると、全国的規模で寺院勢力の統制に着手し、慶長一七年（一六二二）五月二十八日に「天下曹洞宗法度」を出し、総寧寺・龍穩寺・大洞院に対し天下の大僧録を任じたのである^②。この法度の末尾に「右従曹洞宗出案書也」（『本光国師日記』第七）とあることから曹洞宗側から提示された案であり、同年十月の「曹洞宗法度」では総寧寺と龍穩寺に対して家康印を付して発布されてきたことがわかる^③。

しかるに総寧寺・龍穩寺・大中寺が関三刹として成立したのが慶

長二十年（六一五）六月二十八日の「大中寺宛曹洞宗法度」であった。この時の大中寺住持天南松薫（二三世）が入院御礼のため上洛した際、二条城にて浅井七平より法度を渡されたことが『本光国師日記』巻十七に記されている。この慶長二〇年は七月十三日より元和に改元される直前のことであるが、この年は「五山十刹諸山法度」・「妙心寺法度」・「永平寺法度」・「大徳寺法度」・「總持寺法度」が一斉に發布されており、金地院崇伝の幕府の宗教政策が具体化され、特に曹洞宗関係では永平寺と總持寺にそれぞれ法度が出されており、両大本山としての今日の地位を確立した年でもあった。

なお関三利の各寺院が宗門行政を執行するに当たり、江戸での宿寺として総寧寺が独唱院・龍穩寺が麻布四の橋・大中寺が天曉院をそれぞれもち、また江戸触頭である江戸橋総泉寺・貝塚青松寺・高輪泉岳寺が補佐役を勤め（府内三箇寺）、さらに「下三ヶ寺」である天竜寺・功運寺・長谷寺が副役を勤めている。

関三利	江戸触頭	下三ヶ寺	宿寺
総寧寺	総泉寺	天竜寺	独唱院
龍穩寺	青松寺	功運寺	麻布四の橋
大中寺	泉岳寺	長谷寺	天曉院

これらの関三利寺院や江戸三箇寺・下三ヶ寺は了庵派系寺院であり、全国に展開する曹洞宗寺院を統括する立場としては門派の偏りがあるが、横関了胤氏は近世初頭の曹洞宗における関三利の成立の背景について次のように述べている。

徳川幕府が諸宗本山本寺に先じて、曹洞宗に対し一宗統理の法度を制定したのは、本宗には一宗を統ぶるに足る寺院、総寧、龍穩、

大中、吉祥等が、既に関東に在り、宗政運営の機軸として実動し、自ら案を具して法度の制定を幕府に建議して居つたからである。

（『洞門政要』一九三八年、二三頁）

すなわち慶長一七年の曹洞宗法度が寺院側から素案が提示されていることから、すでにその時点で「宗政運営の機軸として実動」していたと横関氏はみるのであり、関三利による支配体制はこうした近世初頭の曹洞宗の支配システムを踏襲したものと理解されている。確かに中世末から近世初頭への移行期の宗門の実態をふまえての意見であるが、何故これらの三ヶ寺が選定されたのかという点については、依然として不明なままであるといわざるをえない。

後述するように、延宝九年の時点で関三利の支配下寺院一四七四九ヶ寺のうち七二一三寺を支配していた総寧寺が、下総関宿城内に建立されたのは天正三年（一五七五）のことであり、その時点では掛川乗安寺再興としての出発であった。そしてそれから慶長一七年までの三七年間という短い期間で、寺号を変えて全国の曹洞宗寺院を総べる天下の大僧録となっていくのである。しかし中世から大雄山を中心に大綱十二派が各門派の寺院が関東各地に展開しており、関東中央に位置する関宿に寺基を移してきた総寧寺が短期間に絶大なる権力を有したことは不思議なことにも思える。

関三利の成立は幕府が宗門的ヒエラルヒーを利用しながら巧みに全国曹洞宗寺院の統制をはかっていった宗教政策の一つであり、それぞれが担った役割は共通ではあるが、しかし大僧録として選定された条件は三ヶ寺の間で必ずしも同じではないように思われる。たとえば

大中寺の場合、十一世の建室宗寅が今川義元の弟であり家康と懇意であったことから、徳川家康との関係を強調する場合があるが、総寧寺や龍穩寺の場合、徳川家とそれほどの縁故はない。神君家康とのつながりでいうならば熊谷龍淵寺（天真派寺院）や双林寺などの方が縁深い寺院であろうし、その他にも関三利以上に家康にゆかりの深い洞門寺院が存在する。また大僧録としてさまざまな宗門統制の施策を発信するに当たり、関東寺院という地理的条件から選定されたものもあるが、そもそも越生龍穩寺も太平山大中寺も江戸から隔たっており、そのために江戸三ヶ寺や宿寺が設けられているが、どうしてこのような体制になったのであろうか。関三利の成立については宗門的な寺格の問題、地理的条件、徳川家との関係等、複合的な条件が考えられるが、いまだ検討すべき課題は残されているといえるのである。こうした問題点について本稿では特に総寧寺について以下に考察していくことにしたい。

二、総寧寺の寺基移転に関する諸問題

安国山総寧寺（市川市国府台）の特殊な事情については総寧寺側の資料である「下総総寧寺記」「安国山雜誌」に具体的な説明が見出せる。

これらの総寧寺資料では通幻寂霊によって開かれた四箇道場の一つとしての総寧寺の由緒を伝え、近江・掛川・笠間・関宿網代・関宿内町・国府台と何度も寺基を移転したものの、その法統が如何に伝えられてきたのかについて語られる。このうち総寧寺の通幻開山説については萩原龍夫氏による「下総総寧寺と下野大中寺―著名禪宗寺院の謎とそ

の解明」⁴なる考察がある。萩原氏は江戸期の寺伝・燈史等の資料を精査し、特に通幻寂霊の伝記について湛元自澄撰述『日域洞上諸祖伝』〔元禄六年（一六九三）と嶺南秀恕『日本洞上聯燈録』〔享保二年（一七二七）を対照させ、前者が通幻開山の寺を永澤寺・龍泉寺・妙高庵・総寧寺の四ヶ寺を掲げるのに対し、後者は永澤寺・龍泉寺・妙高庵の三ヶ寺を掲げ、総寧寺を除外している点を指摘する。そして下総総寧寺の元となった近江総寧寺の存在について「近江総寧寺の存在は管見では寛永十年（一六三三）の『曹洞宗通幻派本末記』が最初である」とし、さらにさまざまな資料を考察した上で次のように述べている。

説き去り説き来つても、一向に総寧寺の実相を明かすことができなかった。しかしながら以上の経過のうちに、賢明なる読者は中世の禪宗僧徒の活動と、近世の本末制度下の固定した寺院組織との落差をほぼ理解なされたのではなからうか。

このように誠に持つて回った間接的であるが、大僧録筆頭の総寧寺通幻開山説に疑義を投げかけたのである。

ここで筆者が注目するのは嶺南の『日本洞上聯燈録』の開版に対する出版禁止の一件である。延享三年（一七六四）五月付で関三利から下された触書には次のようものであった。

一、江戸貝塚青松寺隠居秀恕儀、近頃日本洞上聯燈録都合拾参冊致開板候、右は宗旨法系筋に而容易に開板難成事、殊享保七寅年御觸も之有之処、御奉行所江不相願並三箇寺江茂無其断及板行候事不埒に付、於御奉行所板木焼捨被仰渡聯燈録之儀は不殘取集御奉行所江差上候様被仰付候間、上件之書所持之寺院有之候

は、三箇寺江可被差出候、若隱置脇より於露頭者、可為越度候、勿論右類之書籍向後猥に開板仕間敷候、此旨可被相心得候、以上

総寧寺
大中寺
延享三丙寅年五月
龍穩寺

この『日本洞上聯燈録』発禁問題については洞門ではよく知られており、大内青轡も明治一八年に『洞上聯燈録』を重刊する際、その跋文に関三利による厳しい処断を紹介した上で、自らの重刊事業も通幻の「文字点検」の家風に違背し「予遂不免^レ為^二仏祖之罪人^一乎。」と述べている。

この一件については、すでに栗山泰音『總持寺史』(八七五頁)、『洞門政要』(九三頁)、原田弘道『日本洞上聯燈録』開板を遠る諸問題(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五七号、一九九九年)、山本世紀『上野国における禅仏教の流入と展開』(二〇〇三年、二三七頁)などに言及されるが、特にさまざまな角度からこの問題に考察を加えられたのが原田氏である。原田氏は『聯燈録』開版については、通幻寂霊の「文字点検」の家風に乖くことを指摘しつつも、関三利側の触書が「出願手続きも取らず、無許可で事に及んだことを問題にしている」ことに着目され「儒臣の助力を得るに至って、関三利・官に対抗し得る権威とその影響力を背景に、半ば見切り発車的に弟子華嶽秀曇等によって出版の運びとなった」ことに対する断罪であったという見解を示しておられ、さらに嶺南の浄土業兼修という「不徹底さ」についても指摘され

ている⁽⁶⁾。

しかし、この発行禁止処分の理由が無断出版であったとしても、それは手続き上の問題であり、『聯燈録』出版を「不埒」と断じ、奉行所において「板木焼捨」し、『聯燈録』を残らず回収し、隠匿して露頭した場合も断罪するという厳しい処遇は、この『聯燈録』の内容に重大な問題が存在するといえるであろう。その一つがこの『聯燈録』がそれまでの通幻伝において総寧寺を開いたという説を改め、通幻開山の四箇道場説を否定したからではないだろうか。

ただし『聯燈録』には逆のケースも存在する。元禄九年(二六九六)に幕府寺社奉行四名の連署で「本末異論裁断之条々」において、龍穩寺と上州補陀寺との間の本末論争で、無極慧徹開山説を唱えていた関三利側の龍穩寺の主張を退けた一件があるが、その三十年後に出た『聯燈録』巻四では無極慧徹伝の個所において龍穩寺も上州補陀寺もならんで鼻祖(初祖)とす(「武州龍穩寺、上州補陀寺。竝為鼻祖焉」とあり、龍穩寺の無極開山説を出していたのである⁽⁷⁾。

この事実を受けて、山本世紀氏は「同書(『聯燈録』)は曹洞宗の法系に重点をおいた伝記集であるため同書の流布は、関三利が下位寺院であることを明確化し統制機関としてマイナスであると判断したためであろう。」と述べておられる⁽⁸⁾(内は筆者)。

山本氏の見解は誠に妥当な結論であるが、とりわけ総寧寺の通幻開山説の否定は総寧寺の権威そのものを否定する深刻な問題として関三利側は受け止めたものではなからうか。

さて本稿では近世の下総総寧寺が何故関三利という特別な地位に当

てられたのかという問題について考察するので、近江総寧寺の問題からはひとまず離れ、遠州乗安寺開創以降の歴史の流れを追っていくことにする。まず遠州乗安寺の成立について「総寧寺記」と「安国山雑誌」には次のような記述が見える。

①「総寧寺記」(『曹洞宗全書』「寺誌」四三八頁)

八代越翁因_レ事_二懇錫於遠之懸川_一。応_二領主之命_一創_二宇於城南_一。乗安寺是也。九代字仲居_二二世_一。故永沢最乗之輪住補_レ之。十代州翁居_二三世_一。故有_二玄翁再擯之訟_一焉。永祿之末懸川落城。乗安寺焼失。故州翁退居_二於常之玄勝院_一焉。

②「安国山雑誌」(『統曹洞宗全書』「寺誌」五二頁)

同越翁代。天下当_二鼎革之時_一。猛將銳師。互争_二奪國城_一。英雄姦賊。縦擾_二乱民村_一。因計不_レ勝住_二在于江州_一。享祿年中。有_下將_二以移_二総寧於東海_一之志上。当_二是時_一。頼遠州懸川城主。朝夷備中刺史。景_二慕師之風聞_一。而仄懇_二請之_一。於是師輒全帶_二持総寧之山號寺號_一。笏室法系。祖堂世牌。秘在法衣。伝来什物等。而無_二一所_一遺_レ之。蟬_二蛻江州_一。而格_二于遠州_一。迺_二迎之_一。建_二立一寺於城南_一。而令_二師安_二住于此_一矣。因_レ是用_下既城主之所_二慰_二安於師_一之懇命上。以名_二之乗安寺_一。

両資料によって総寧寺八世越翁周超が近江の争乱をよって掛川の領主の請に応じて乗安寺を創建したことが示されている。

この掛川乗安寺の創建については、足立順司氏の「鐘・雲版・鰐口―駿遠から南信へ―」(『静岡埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号所収 二〇二一年度)という近年の研究成果を看過することはできない。この研究報

告において足立氏は静岡から長野にかけての鐘・雲版等の諸資料を紹介しているが、その中で注目されるのが常圓寺(長野県伊那市)所蔵の旧乗安寺雲版である。その銘文には、乗安寺に横山久次が天文元(二五三)年十一月二十日和尚入院記念に雲版一枚を寄進した旨が刻まれており、常圓寺の所伝では織田軍の伊奈侵攻によってもたらされたとのことである。「安国山雑誌」等の総寧寺関係資料で越翁が天文の直前の享祿年中(一五二八―一五三二)に総寧寺を東海へ移転させようとした記述があるが、総寧寺移転ということは確認されないものの、乗安寺の創建年代が判明したのであり、この雲版に記される天文元年と「安国山雑誌」に享祿年間とは年代的にほぼ一致することがわかる⁸⁾。

当時掛川城は今川氏の重臣朝比奈泰能の居城であった。泰能は今川氏親・氏輝・義元の今川三代に仕え、寿桂尼(今川義元の母)の兄である中御門宣秀の娘を室とし、主君とも姻戚関係を有し、雪斎等とともに今川氏を支えた重臣であった。今川氏による三河攻略など重要な役割を果たした人物である。

さてこの泰能が開基となり越翁周超を開山として迎えたのが乗安寺である。泰能は弘治三(一五五七)年に病没しているが⁹⁾、このときの乗安寺住持は州翁寿欣であった。

しかしこの掛川乗安寺も四十年も経ずして東海の戦火にあって焼失してしまう。「総寧寺記」・「安国山雑誌」はいずれも永祿年間末に掛川城が落城し乗安寺が焼失したため、州翁が常陸玄勝院に退去したことを伝える。この永祿年間末の掛川城落城というのは、永祿一一年(二五六九)十二月に同盟関係を破って武田信玄が駿河に侵攻したた

め、今川氏真は掛川城に逃れるも、武田氏と結んだ徳川家康に掛川城を攻められ、半年籠城した後、翌永禄一二年五月に開城したことを指す。このとき掛川城にあつて徳川勢と戦ったのは朝比奈泰能の子泰朝であつた。弘治三年の父泰能没後、掛川城を受け継いだ泰朝は、武田・徳川両軍の侵攻を受けて今川家中の者が武田や徳川に寝返る中、主君今川氏真に忠義を尽くし戦い抜くが、結局掛川城を明け渡すことになり、相良の港から伊豆へ逃れる氏真と同行している。氏真はその後相模小田原の北条氏に逃れ、これによって今川氏の領国支配は実質的に終えたのである。

この掛川城で今川方として奮戦した一人に都築秀綱（慶長五年（一六〇〇）卒）がいた。秀綱は徳川方の本多忠勝らに降伏しその配下となり、五百貫の所領を安堵されているが、秀綱は後述する総寧寺一三世の巨海良達の兄であり、このことが後の玉縄北條氏の存亡に重要な意味を持つことになる。

掛川城落城後、氏真が小田原へ入ったのは氏真の室早川殿が北條氏出身であつたためである。以後北條氏の庇護を受けつつ今川再興のための画策をなしているが果たせず、元亀二年（一五七二）年には氏康を継いだ氏政が武田氏と和睦すると小田原を離れ、浜松の家康の下に入り、さらに京都にて父の敵織田信長とも面会している。

さて前述のように「総寧寺記」等は掛川乗安寺焼失後、州翁は常陸玄勝院へ退去したとされるが、玄勝院は州翁の師、学仲覚周（弘治三年（一五五七）寂）が開いた寺である。今川氏真が関東に入つて今川家の復興を画策したように、州翁も師の学仲のところに避難した乗安寺再興

をはかうとしたのであろう。なお玄勝院の開基は笠間朝清（応性玄勝大居士）であり、朝清の菩提寺として長禄元年（一四五七）開創とあるので、学仲とは約一世紀隔てがあり、学仲は中興開山として入つたのであるう。

玄勝院の開基家の笠間氏は鎌倉より続いてきた名門であり、鎌倉幕府滅亡後、笠間泰朝は南朝方として戦うも北朝方の佐竹氏に侵略され、以来佐竹氏との対立状態にあつた。笠間氏の滅亡は結果として小田原北條の滅亡と時期を同じくしている。秀吉の命による小田原参陣の際、笠間氏は佐竹氏とともに小田原参陣しようとした宇都宮国綱の命に従わなかったため追放され、三八六年続いた笠間氏は滅亡している。

なお、乗安寺の世代は開山越翁、二世学仲、三世州翁、四世義翁と次第し、玄勝院の世代も開山学仲に続き、二世州翁、三世義翁、四世養室、五世巨海、六世万極と次第する。両寺院の三代の重なりは乗安寺から玄勝院への移行期であることを示しているとともに戦国末期の東海・関東の政治状況を反映しているといえるであろう。また総寧寺では通幻寂霊を開山として八世越翁、九世学仲、十世州翁、十一世義翁、十二世養室、十三世巨海、十四世万極となっており、乗安寺・玄勝院を引き継ぐ形となっている。この他相模天徳寺も在仲宗宥を開山とし、桂堂、天叟、越翁と世代が続いており、こうした事例は戦乱期に寺基を移転していった寺院の歴史的課題として検討を要するところである^⑩。

さてこの玄勝院から義翁は閑宿へ入るのであるが、この間の動きを「総寧寺記」・「安国山雜誌」には次のように記述されている。

①「総寧寺記」

天正三年。関東之大守北條氏政公賜「総州関宿網代之地」。同年五月此処創「一字」而移「江之総寧於関宿」。安国山総寧寺是也。

②「安国山雜誌」

輒天正三乙亥之春二月十八日。蒙「北條氏政公之所」寄「附総州関宿網代之地」。殊賜「手染之花押」。其書曰。宜「被」為「建立」一寺於網代之地。若有「所用」可「承」之。云々。於是鳩「工」。而建「殿宇大厦山門長廊」。輪奐興起。輒從來所帶之寺號山號法系世牌。并至「於鎮守白山・伊勢・熊野之三祀等」。所「伝在」之寺例・山格。無「一」而有「拳皆不」備「復于古」矣。正是總之安国山総寧寺是也

③「下総総寧寺鐘銘」

移至「八世越翁時」。佐佐木氏族滅矣。惟時諸侯争「国列国峰起」。因「茲永祿三庚申。駿州今川氏之家臣備中守朝比奈教翁。住」干遠州懸河乘安寺「者年」于茲。是蓋避「兵之調敷。至」十一世義翁。天正三乙亥北條氏政。仰「翁之道德」。於「本州関宿」寄「附梵地」。越聚「材命」工殿堂玉成。再盛「通幻道化」大振「新豐玄風」。至「十七世骨山」。

このように「総寧寺記」・「安国山雜誌」・「下総総寧寺鐘銘」は天正三年に北條氏政によって関宿網代の地に総寧寺が建立されたことを伝えるが、前者の「移」江之総寧於関宿、後者の「輒從來所帶之寺號山號法系世牌。（中略）所「伝在」之寺例・山格。無「一」而有「拳皆不」備「復于古」矣。」という記述から、天正三年関宿総寧寺の建立は近江総寧寺の再興という目的が明示されている。またこの天正三年史料として

「氏政公朱印御制札」も残されている¹¹⁾。

掟

一至干御寺内門前竹本仮初二も不可伐事

一寺中之堀之内二不可陣取事

一惣而狼藉ケ間敷儀毛頭不可致之事

右違犯之輩有之者不及用捨可承候、可処嚴科者也、仍如件

天正三年乙亥

（朱印「禄寿応穩」）五月廿日

遠山弥次郎奉之

総寧寺

しかし天正三年の時点で関宿に建立されたのは総寧寺であったかどうかは問題が残る。たとえば天正六年（一五七八）に甲斐興因寺と信濃定津院との争論の一件において信濃龍雲寺の北高全祝が乗安寺と龍穩寺に書状を送っているが、この乗安寺は関宿乗安寺であろう。

この争論は武田勝頼が共に拈笑派寺院の興因寺と定津院が天正六年に最乗寺輪住を巡る争いを同年六月一二日付の書状にて北高に相談し、北高はこれを受け七月十一日付書状にて、内書と正式な請状を別々に両寺院に出してしまつた最乗寺側に意見を述べ、さらに同年九月八日に乗安寺・龍穩寺宛の書状を出している¹²⁾。

最乗寺住院之事、拈笑一派之内、両寺双論既 太守江言上故、被仰出分者、自宗派頂顚以輕重之手形可落着云々、定回報□□モ不可有私曲、此旨三心禪師奏達所希候、恐慢頓首

季秋八日

龍雲寺

名判

乗安寺

龍隠(隠)寺 衣鉢閣下

この天正六年は上杉謙信が没年であり、いまだ織田・武田・北條・伊達をはじめとする戦国大名の領国支配が確立していた時期であった。その後天正一〇年の武田氏滅亡と本能寺の変、天正一八年の小田原城落城と時代は急速に統一へ向かうが、この天正六年の時点で武田の領内の曹洞宗寺院の紛争について北高が関宿の乗安寺宛の書状の意味は、大きいものがある。

また萩原氏も関宿移転後も乗安寺と号したことの証左として、①天正頃大中寺の争論を裁いた古河公方足利義氏の判物の宛名が竜穩・乗・乗安の三カ寺であったこと、②妙高庵の周鑑・周巖・闇甫の三名が峨山和尚二百年忌を翌年に控えて乗安寺宛の招請状を送っていること(下総総寧寺文書中)を指摘している。

こうしてみると慶長十七年の関三利としての関宿総寧寺は天正三年は乗安寺としての再興であったといえよう。この関宿乗安寺は記述の天正六年の武田領内の紛争の過程でもその名が登場したように北條の領国を越えて曹洞宗寺院の統括する力、少なくとも最乗寺輪住に関する権限を有していたというべきであろう。

そもそも関宿という地は利根川と江戸川の分岐点に当たり、水上交通の要所であるが、この関宿を支配していたのが関東の反北條勢力の旗頭、梁川氏であった。梁川氏は関宿を防衛するために上杉謙信に挙兵を依頼し、この要請を請けて小田原城下に兵を進めているし、上杉と北條の同盟が成立すると、今度は武田信玄に挙兵を依頼し、永祿

一二年(一五六九)の武田の小田原攻めが敢行されている。後にこの関宿の地は従来東北地方の物資が房総半島を回って江戸へ入るルートから、外洋を通らず利根川から江戸川へのルートが開発されて水上交通の要所となっていく。ともあれ後北條氏は梁川氏居城の関宿城を落とすことが関東支配の重要な課題であったのである。

天正元年(一五七三年)、第三次関宿合戦で北條氏照は関宿城を夜襲し失敗するも翌年再度出兵する。この時築田藤政は佐竹・上杉謙信に救援を求めたのであるが、北條方は梁田救援軍の足並みの乱れに乘じ、関宿を包囲し総攻撃をかけると、築田氏は佐竹氏の仲介を頼み関宿城を開城し、水海城へ退去している。これにより、築田氏の関宿支配が終わり、関宿は北条直轄の軍事拠点となったのである。

こうして天正初めによりやく関宿が北條方に落ちたとき、ほぼ同時に創建されたのが掛川から笠間に逃れた乗安寺、後の総寧寺であったのである。新たな北條氏の関東支配の拠点となった関宿の網代にこの乗安寺が建立されたことは後北條氏の関東支配と深い結びつきを有するものであった。その後網代から同じ関宿の内町に移転し、寛文三年(一六六三)には現在の国府台へ移転している。それは利根川と江戸川に挟まれた水利に地であると同時に洪水に悩まされたからであった。ところで、この梁田氏の菩提所が東昌寺であり、即庵派の派頭寺院として関東の了庵派寺院の中でも大きな力を有していた。しかし天正三年に対岸の北條の関宿城内に乗安寺が建立され、総寧寺が大僧録となるとその末寺に組み込まれるに至るが、その過程において当然激しい本末論争が展開されている。

三、関宿総寧寺の成立と巨海良達

総寧寺が慶長一七年に大僧録となる直前の天正年間から慶長年間にかけて総寧寺を護持したのが巨海良達（二三世）である。巨海については『巨海代』・『巨海代抄』が承応年間に刊行され、近年国語学における抄物研究の分野で中世口語資料としてこの代語抄が研究され¹³、昭和四八年には汲古書院より「禅門抄物叢刊」の第一号（駒澤大学開学九十周年記念出版）として影印出版されている。

しかしながら巨海は後北條氏から徳川の支配に代わる激動の関東にあった活躍した僧でありながら、その行実についてこれまで十分に検討されてはいえず、以下において巨海の実を紹介してみよう。まず巨海良達についての伝記資料は『日本洞上聯燈録』卷一〇（『曹洞宗全書』史伝「二七九頁」）に次のように記されている。

下総州総寧巨海良達禪師。縁契^二養室^一。出住^二常之玄勝^一。移領^二総寧^一。示衆曰。宗門有^二八要玄機^一。同互不同互。宛転傍参。枢機密用。正接傍提。是弄^二那箇旨^一。山桃落尽春帰去。猶有^二子規一枝上啼。中秋垂語日。露山指^レ月曹溪話^レ月。不^レ涉^二三途^一。如何是第一月。衆無对。師曰。嶺頭遙指白雲飛。僧問。看経須^レ具^二看経眼^一。如何是看経眼。師曰。寒松十里吼^二清風^一。流水一溪声未^レ止。

しかしこの伝記は玄勝院と総寧寺に住したことと二つの示衆が記されるのみで、その出自や入院の年号をはじめ具体的な行実について明らかにしていない。ちなみに二つの示衆はいずれも『巨海代』の第四・第七六の代語を引用したものである¹⁴。したがってこの伝記は残念

ながら巨海の具体的な行実についてほとんど情報を提供していないよう。

わずかに総寧寺一八世勝国良尊から信州長国寺宛の寛永五年の古文書には、慶長二年に巨海が大雄山最乗寺にあつて宗門諸法度を裁定して長国寺へ信州僧録を命じたことが記録されている（『洞門政要』二三頁）。

慶長二丁酉歳於大雄峰、巨海和尚宗門諸法度裁相定砌、信州僧侶之提貴寺へ被命之條、因茲先年骨山老漢亦法度書被出者乎、雖然大綱一派之義者定津院へ申遣候、自然定津院不及分別義於有之者、互有相談者也、仍如件

寛永五戊辰十月十一日 総寧寺 良尊 判

しかるに『巨海代』・『巨海代抄』には巨海が入院した時の代語や仏事や年分行事に因んだ代語が収録されており、巨海の実を知る手がかりとなるのである。そこで関連する代語を抽出してみよう。

〔1〕第一代語

類十一住 百丈ノ海禪師ニ僧問、如何是^レ奇特ノ事、師云、独座大雄峰、山在之 僧礼拜、師便^チ打ッ、拶、恁麼酬対ノ処^ロ却^テ有^二二窺得^ル分^一 玄勝入院 麼^マ代、山ハ横ヘ獅子ノ秀^ルニ、水ハ接^ス大湖ノ清^キヲ、○光孝ノ証悟如瓊^キ禪師ニ僧問、如何是蘇台ノ境、云ク、山一清、云ク、如何是境中ノ人ト、云ク、衣冠ハ皇宋ノ後^チ、礼樂ハ大周ノ前^キ、

〔二丁表〕

〔2〕第一八代語

人天眼目在 古語云、種^ハ即^チ達磨并二祖也^リ、枝葉^ハ即^チ道副惣持道胡^フ、

八月廿七日 徒也^ト、擧、未審今朝如何弁^三取^シ其^ノ種^ト与^二枝葉^一、代、大応寺入院 白雲鎖斷ス岩前石、掛^レ角^ヲ羚羊不^レ見^レ蹤^ヲ、類十一住山在之、達磨ハ仏ヨリ廿八代目也、 (三丁裏)

〔3〕第三五代語

投子録ニ 鷲嶺笑^イ昌^{ニシテ} 香色芬芳^{タリ}、列聖叢^ノ裡^デ、独^リ没^ス商量^ヲ、玉繩新大 擧、請一転語、代、彩鳳舞^フ丹青^ニ、大恵武庫在之、取句、応寺入院 黄河九曲、 (六丁表)

〔4〕第三七代語

竜宝院十 曹山^ニ僧問、靈衣不^レ掛時^キ如何、師云、曹山今日孝満、擧、三年忌 今朝丁^ニ大応栄公居士^ノ辰忌^ニ設^ク慇懃^ニ礼奠^ヲ、畢竟作麼生^カ是孝満^ノ処、代、重韓休^ニ勝負^ヲ、金殿^ニ臥^ニス (六丁裏)

〔5〕第九七代語

愚庵録ニ 古德^ニ僧問、古人拈椎豎^ル意旨如何、師豎^ニ起^ス弘子^ヲ、大応寺^{ニテ} 進^ス云^ク、畢竟^ノ意^ヲ作麼生、師云、汝^待一口^ニ吸^ニ尽^シ西湖水^ヲ、只^タ向^テ汝^ニ道^ク、擧、古德拈提^テ処如何委悉^シ、代、大^イ眠^ハ還^ニ他^ノ肌骨^ノ好^キ、不^レ須^ニ臨^レ鏡^ニ画^ニ娥眉^ヲ、天童録在之、○本則末云、上堂僧^一道、乃云、譬^ハ如^ニ琴瑟笙篴琵琶^一、雖^レ有^ニ妙音^一若^シ無^ニ妙指^一終^ニ不^レ能^レ発、 (一七丁表)

〔6〕第一一五代語

四月廿六日 草鞋戴^テ頭^ヘ出^テ門^ヲ去^ル、四月円荷葉々新^{ナリ}、擧、今朝、宗英一周キ 一^ニ靈向^{ニテ}斬^下一^ニ見^ニ如何^ニ尊宿^ノ之意^ヲ、代、夢^メ回^ル一^ニ曲漁家^ノ傲、月淡江空見^ニ白鷗^ヲ、江湖集在之、(二〇丁表)

この『巨海代』の記述によって判明するのは、巨海がまず玄勝院に

入院し、玉繩大応寺、新大応寺へと移っていることがわかる。玄勝院は前述のごとく掛川乗安寺から州翁らが常陸笠間に逃れた寺であり、『笠間城記』の玄勝院の項に巨海の事績と『巨海代』が言及されている¹⁵⁾。

この『巨海代』に基づくならば、巨海は玄勝院から大応寺に移り、しばらくして新大応寺へ入ったことになっているが、この新大応寺とは北條氏の玉繩城下の陽谷山龍宝寺（鎌倉市植木）に相当する寺院である。この『巨海代』に「龍宝院忌十三年忌」（天正一八年に当たる）と頭注に明示された代語が収録されるが、この「龍宝院」とは北條氏繁（龍宝院殿大応栄公大居士、天正六年（一五七八）寂）に他ならない。龍宝寺はこの北條氏繁の菩提所として北條氏勝（玉繩城三代目城主）が天正三年に建立され、開基は北條綱成（玉繩城主初代、瑞光院殿美州宗心大居士）とされる。この天正三年という年は、北條氏政が第三次関宿合戦でようやく関宿城を落とし、乗安寺（総寧寺）が建立された年である。元來文亀三年（一五〇三）創建されたと伝えられる瑞光院（綱成の香花院）があり、これを後に移転したのが龍宝寺であるとされる¹⁶⁾。しかし天正年間にはこの龍宝寺は大応寺であった可能性が高い。というのも『新編相模風土記稿』では龍宝寺所蔵文書を次のように引用している（傍線は筆者）。

貴老実山派嗣法之筋目仁而在仲派巨海和尚開基之大応仁、往着候得者、嗣法與宗派混乱之際、以其理一応、先寺中退出仁申定也、雖然與自老師良悦之相統歴然、難違乱問帰住之处不可有相違者也、此上者號龍宝寺仁被定置、根本如石実山派之法仁而、寺中興隆専

要也、此旨愚僧、判者総寧寺與中合、相証処分明也、仍一筆如斯、
寛永二乙丑八月十八日、龍宝寺侍者中、大中寺松薫華押

この文書は寛永二年（一六二五）に大中寺一三世天南松薫が総寧寺と相談の上、龍宝寺へ当てた書状である。これによると、龍宝寺は実山派の泰恕宗栄（永禄四年寂 南足柄市長泉院三世）が開き、実山派寺院であったが、在仲派の巨海の在住のときは大応寺であり、この巨海退出後、在仲派・実山派間の争論の末、実山派の関翁良越（原文では「良悦」）の法系が相続し龍宝寺と号すべきとの判断が下された文書である。したがって『巨海代』頭注に出てきた「大応寺入院」と「玉縄新大応寺入院」という記述はまさに巨海当時の寺名であったことが確認される。ところでこの大応寺時代の巨海について注目すべき行実が伝えられている。『新編相模風土記稿』（天保元年から編纂）には次のような記述がある。

十八年小田原の役に氏勝玉縄に籠城して死を決せしを、時の住僧良達扱て遂に降参なさしむ〔事は城廻村、玉縄城跡の條に詳なり、後宗派の事により良達衆徒と異論に及び退院せり、此頃は寺號を大応寺と唱へし【小田原記】に天正十八年の條に搔龍宝寺と記せしは訛なり、論罷て良達還住するに及び今の寺號に改む

秀吉の天下統一の最終段階である小田原攻めの際、玉縄北條氏の最後の氏勝が山中城で大敗して玉縄城に戻って籠城した際、巨海良達が開城させたという記事である。

また福原高峯・長谷川雪堤による『相中留恩記略』（天保一〇年（一八三九））には「天正十八年、小田原御陣の頃、氏勝、山中城落去の

後、玉縄城に楯籠り打死と思ひ極めしを大神君様の仰により、本田忠勝殿へ附属の士、式人の内、松下三郎左衛門は、時の住職良達和尚の甥なりしをもて大神君様の上意を伝へ、良達、心を尽し終に氏勝を降参なさしめし事は、玉縄城蹟の條に詳なり。〔傍線は筆者〕とあって本多忠勝の配下の松下と巨海とが親戚関係であり、その縁から巨海が氏勝を説得したと伝えている。この巨海と松下との縁戚関係については『北條記』巻第六にも基づくものであろう。

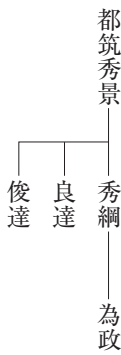
愛に又家康卿、日ごろ左衛門大夫（氏勝）を知り玉ひしかば、本多中務（忠勝）の内に、都筑弥左衛門・松下三郎左衛門は、左衛門大夫と知人なれば、彼兩人使として、「関白へ降参然るべし」とありしかども、「重代の武恩捨てがたし。その上、今何の恨ありて唯今敵となるべき」とて、更に合点なかりし処に、松下三郎左衛門が門族に、竜達和尚という禅僧あり。そのころ左衛門大夫が墓所龍宝寺に住寺して、氏勝師資の契り浅からず、松下、かの僧と相談して、然るべく取つくろい申しければ、左衛門大夫たちまちに翻へり、同（四月）二十一日家康卿まで参り、出家人道の姿になり、墨の衣に製姿を掛け、家康卿同道にて関白へ出仕し、本領安堵の御教書を下さる。是を始として、北条譜代の士伊豆下田の城主志水上野守も出家人道して城をわたり降参す。そのほか佐倉・土気・東金・両庁南・武田源三・河越大道寺。江戸遠山など、悉く明渡す。

〔傍線と（ ）は筆者による〕

しかし巨海が松下三郎左衛門の叔父であったというのは誤伝である。『北條記』は氏勝の知人である本多忠勝配下の都筑弥左衛門・松下三

郎左衛門の二人を挙げるが（「本多中務（忠勝）の内に、都筑弥左衛門・松下三郎左衛門は、左衛門大夫と知人なれば」）、巨海の縁戚者は松下ではなく都筑であり、この二人を取り違えたためである。

『新訂寛政重修諸家譜』卷六八一の「本多」(第十一、二四頁)の本多忠勝の項には「忠勝すなはち家臣都筑彌左衛門為政を玉繩にゆかしめ、為政が淑父の僧了達をして城中にいれ、城をまもりて功を遂むこともつともかたかるべきむねよく論しければ、氏勝つゐに降りて城を渡す。」とある記述がより正しく、松下ではなく都筑為政との縁戚関係を伝えている。また『新訂寛政重修諸家譜』卷八〇四の「都筑」(第三卷一二三頁)を確認すると都筑家は次のような家系図となっている（良達の項には「出家して下総関宿の総寧寺に住職す」と明記されている）。



すなわち玉繩城主北條氏勝を説得した巨海の兄は、記述のごとく掛川城で家康軍と戦った筑都築秀綱であり、その息が玉繩城を包囲していた本多忠勝の武将都筑為政であった。巨海良達は元来掛川にあって俗姓は都筑であったのである。掛川落城後都筑氏は本多忠勝の配下になるが、掛川城落城とともに焼失した乗安寺の門流は常陸玄勝院に退去していくのであった。してみると、常陸玄勝院から玉繩大応寺に入り北條氏勝の帰依を受けていた巨海と、掛川落城から本多忠勝下の武将となって玉繩攻略軍にあった都筑為政がこの天正一八年の玉繩の地

において出会い、玉繩開城に結びついたのは不思議な縁というべきであろう。

ちなみに北條氏勝は山中城で豊臣方の大軍を迎え撃つ直前の天正一八年二月一〇日、玉繩城の家臣堀内勝光に次のような書状を送っている。

山中城一日と持ち候こと、なりがたく、いよいよ討死と極わまり候。おつつけ落城と、聞及ばされ候はば、内々申し談じ候う通り、玉繩城その方（勝光）に預け置き候う条、留守居の者、諸人集め籠城し、最後の軍さを致され、惣曲輪・二の九まで破られ候はば、本丸へ取り籠り、母の儀を差し殺し、城に火をかけ、其方（勝光）自害もつとも候。（丹波堀内文書、北条氏勝書状）

すなわち、氏勝は北條氏としての誉れの証として家臣に母七曲殿（北条氏康の娘）さえも刺し殺すように命じていたほどの覚悟であった¹⁷。こうした氏勝が開城させるように説得できたのは菩提寺住職としての立場と巨海の力量もあつたことであろう。無論、玉繩開城は巨海一人の功績ではないが、掛川・玉繩を結ぶ都筑氏の縁が、結果として家康の関東支配において旧北條の家臣団や社寺勢力を引き継いでいったことを考慮するならばこの玉繩開城の意義も大きいものがある。

さて、巨海はその後関宿乗安寺（もしくは総寧寺）に晋住しているが、その入院時期は明らかではない。しかし『巨海代』には「旦那九州陳（陣）」（九丁裏）・「在仲忌」（二丁裏）・「宗英忌一周忌」（二〇丁表）と頭注がみられるので、『巨海代抄』で下巻に当たる代語が総寧寺時代の代語であることが推測され、玉繩開城後ほどなくして関宿へ移っているこ

とがわかる。『巨海代抄』下巻には「亦タ当山境地ノ底ヲ見サシ、寺前ノ谷川ハ上総山中ヨリ流出シテ陸常下野エサカツテ流レ出テ東八箇国ニ漲リ落タ。誠ニ板東一ノ絶境ニ地デハナイカ」(下巻六丁裏)とあり、この風景は関宿城下にある総寧寺に他ならない。また冬至の代語の抄には「当寺ハ開山越翁表ノ忌日ニ当ツタニヨツテコノ句ヲ設タ。越翁ノ乗安寺ヲ建立在テ法幢盛ニ行ジテゴザ在ツタ。天下ノ兵乱エ其ノ已後三十年余リ門庭衰廃シテ山中モ荒野トナツテアセハテタ処ヲ今マ山僧ガ出デ当山ヲ斫リ開テ開山ニ勸定申スガ補錐シヨフタ」(下巻三四丁裏)とあるのは、重要な意味を持つ。巨海の時点では「当寺ハ開山越翁」であつて、ここに掛川乗安寺再興の意志がこの代語に表明されているといえよう。

また「旦那九州陳(陣)」と「宗英忌一周キ」とある代語は家康の関東支配下における初代関宿城主松平康元(家康の異父弟)に関するものである。ただ問題となるのが「宗英一周キ」なる代語である。宗英とは松平康元(大興院殿傑伝宗英大居士)であり、慶長八年(一六〇三)に没し、関宿には菩提所として宗英寺が建立されている。その代語抄には「拶云、傑川宗英モ此ノ当鋒下ヲサエ見届ケタラバ」とある。この康元の没年である慶長八年は、すでに巨海良達は示寂しており、巨海の示寂年が相違するか、逆修で行われたのか、問題を含むのである¹⁸⁾。

さて玉縄開城後の北條氏勝であるが、岩富藩一万石の大名となり、慶長一六(一六一)年に五三歳で岩富で没しており、真言宗豊山派の宝金剛寺(下総国印旛郡直弥村)に葬られている(「静覚院殿恵公居士」)。また、大応寺から改称した龍宝寺も氏勝の位牌所となっている

(上岳寺殿角翁良牛大居士)。関宿と岩富は同じ下総であり、その後も氏勝と巨海は交流はあったと思われるが、具体的な史料は管見による限り伝えられない。

氏勝は子がなく、養子となった北條氏重(保科正直の四男)は氏勝の没後、下総岩富藩を継ぐが、下野富田藩に転封され、さらに遠江久野藩、下総関宿藩、駿河田中藩を経て、掛川藩三万石の大名となっている。氏勝を継いだ氏重は不思議なことに関宿や富田といった総寧寺・大中寺の所在する藩を治め、最後は乗安寺のあった掛川で氏勝菩提所である上嶽寺を建立し総寧寺勝国良尊を開山に迎えている。玉縄北條氏と総寧寺は深い縁に結ばれていたといえよう。

四、むすびにかえて

江戸幕府の宗教政策は、戦国期に軍事的な影響力をもった社寺勢力(本願寺・比叡山・高野山等)を如何に統御していくのかが大きな課題であった。寺格や紫衣などの朝廷が関わってきた権限を幕府に移していくとともに、寺社法度・本末帳作成の過程で本末制度の確立、さらにはキリシタン対策のための寺請制度を通じて行政的機能を各末端寺院が担わせるというように、幕府を支える機構として利用されていたのである。

関三利の役割はあくまで幕藩体制下に曹洞宗宗門の一万七千以上もの寺院を支配していくことであつたが、その支配の権威はそれまでの宗門内の寺格・権威とは別な視点で選定されていたと考えられる。曹洞宗に限らず近世仏教の各宗派・各寺院は神君家康との関係性(権

現様お声がかかり」等）を強調することで寺門の興隆をはかっているのであり、従来の伝統的なヒエラルヒーを踏襲せず、あくまで幕府との関連性が重視されたのはいうまでもない。無論これらの関三利は近世の幕藩体制の中で寺格向上をめざし、勧請開山の拡大解釈という手段をとっていくつかの本末論争をも引き起こすに至るが、やはり不徹底に終わったのであった。総寧寺における通幻寂霊開山説も幕藩体制下において創出された説であろうが、総寧寺が関三利として選定されたのは巨海良達の事例に見たように、徳川家との直接的関係ではなく、北條氏・徳川氏との一連の関係の上で大きな力を獲得し得たからであろう。すなわち天正一八年、家康が東海の一大名から転じて、江戸城を機軸に関東の支配体制の基盤作りに成功したのは関東支配していく当たって後北條氏の支配システムを利用することが政治的にも経済的にも有効な施策であり、それは寺院政策においても同様であったのである。

ところで既述のように巨海が総寧寺に入る以前の天正六年に武田勝頼が最乗寺輪住に関する争論を龍雲寺北高本祝に依頼したとき、北高がこの件について乗安寺と龍穩寺に対して書状を送っていた事例は、少なくとも関東・甲信越の了庵慧明派下において乗安寺（総寧寺）が早くから了庵派を統括する力を有していたことを示している。これは天正三年に関宿に乗安寺が再興されて、あまり時を経ていない頃であり、乗安寺は関宿再興以前にも大きな影響力をすでに有していたことを示す事例であろう。いずれにしても江戸幕府の宗門支配はこうした関東においてすでに機能していた実質的統率システムを利用しながら

も、あくまで幕府主導の支配体制へと転換する意味があったのであり、それが総寧寺等の三ヶ寺の大僧録になりえた理由ではなからうか。なお本稿では巨海良達について大応寺在住までしか扱えず、『巨海代』・『巨海代抄』の具体的内容にもあまり言及できなかった点、この点については改めて考察していきたいと考えている。

- (1) 横関了胤『洞門政要』九頁。
- (2) この法度には「龍穩寺 武州ヲコセ 総寧寺 下総関宿 大洞院 遠州可睡」とある。
- (3) 『本光国師日記』第九。
- (4) 『日本歴史』三一九、昭和四九年、なおこの論文は萩原龍夫『中世東国文化と宗教文化』（平成一九年）に収録されている。
- (5) 横関了胤、前掲書九一三頁、『宗教制度調査資料』第二十輯「江戸時代寺法集」、七四「曹洞宗調書」。
- (6) 原田弘道氏は「純粋性を明徴すべき意図を持った立場の人が、浄業兼修という不徹底さを示している事の矛盾が、関三利の忌避を招き、厳しい処断の隠れた理由の一端となったと見るべきか、或いは関三利の処置に失望感を募らせ、浄業への傾斜をより強めて行った結果と考えるべきか、推測に推測を重ねることになるが、筆者は「晩年」という事を考えて、強いて云えば後者の方をとりたいと思うのである。」と述べている。
- (7) 『日域洞上諸祖伝』巻下では「開三山濃之補陀寺」とあり、『洞上聯燈録』も伝記中には「開三山補陀」と記すのみであり、龍

穩寺を開山したという記述はみられない。無極が開山したという表現と無極を鼻祖とする表現は同じであるが、やはり微妙なニュアンスの相違を認めることができるかもしれない。

- (8) ただし駒澤大学図書館蔵『乗安寺法語』所収の「万年山乗安禪寺鐘銘」には「永正中大檀越前備中州太守所□建」。而越翁禪師掌^二僧録^一「安^二千衆^一之地也」とある

- (9) 乗安寺殿松月秀長大禪定門の一連の仏事は駒澤大学図書館蔵『乗安寺法語』(第九丁)に収録されている。また百ヶ日法要の記録が『掛川誌稿』に抄録されている。

- (10) 萩原、前掲論文(『中世東国文化と宗教文化』所収)二七〇頁において総寧・天徳・乗安・玄勝の四ヶ寺の世代対照表が示されている。

- (11) 萩原、前掲論文、二七二頁。

- (12) 岩崎宗純「大雄山最乗寺の輪住制についての覚書」『市史研究あしがら』第三号、一九九一年。

- (13) 金田弘「東国語脈で書かれた抄物二、三——江戸初期東国方言研究資料」『国語学』第二〇号、一九五五年、木村晟「巨海代抄」の慣用表現『いそ．．．よ』について『駒澤短大国文』第三号、一九九一年。

- (14) ただし巨海良達伝に収録されている二つの問答のうち二番目の前半部「中秋垂語日。露山指^レ月曹溪話^レ月。不^レ涉^二二途^一。如何是第一月。衆無対。師曰。嶺頭遙指白雲飛。の部分」は第七六代語とは対応しておらず、この伝記の基になった資料は刊本『巨

海代』ではないことがわかる。

- (15) 『笠間城記』の玄勝院草創に関する記述は、『巨海代』冒頭の「玄勝院入院」の代語に基づいて記されている可能性がある。

- (16) 団野弘之編著『陽谷山龍宝寺史』一頁。

- (17) 『藤沢市史』第四卷(一九七二年)一一二三頁。

- (18) この宗英一周忌の代語と巨海良達の示寂年代の問題については『巨海代』輪読会において広瀬良文氏よりご指摘いただいた。